

(彼がロマンスに遭遇したかどうかはあえて書くまい)。沖繩が返還されてすぐの頃、今のような大型リゾートは本島にもほほなかったし、与論はそれまで日本の「国境」、要するに日本人が普通に旅できる南限だったから、「憧れの島」と言えた。時は流れた。訪問の夜、

る。与論島は「飛行機を乗り換える手間さえ甘受すれば、割と普通に行けるのである。例えば『東京から船で24時間』みたいなことはありません」「絶妙に不便で、死に目にもまず会えない。医療も診療所のみ。緊急時には自衛隊のヘリで硫黄島に搬送され、そこから飛行機で東京へ。滑走路の長

明示こそされていないも

小笠原と比較する!?!

廃虚と化したリゾートホテル、ひょっとしたら私が泊まっていたら与論観光ホテル(大島運輸経営)の残骸を反芻しながら、居酒屋(島有泉を独り飲(や)りながら、いまは亡き友を偲んだ。)

の、「例えば」が東京から約1000キロ南、小笠原諸島の父島だということ。海やダイビング好きな(いや、好きでなくても)一目瞭然。確かに、与論と父島は人口こそ5000対2000だが、ほぼ同緯度(北緯27度)同じ大きさ(20

さが確保できず、飛行場づくりは暗礁に。1000キロを給油なしで飛べる小型機の目処もなかなか立たない。



高校生のときに泊まったかもしれないホテル跡

は愉快ではなからう。与論の悲しみにも気がつかなかったね。山口在住の人類学者、安溪遊地さんが書いた「調査されるという迷惑」(みずのわ出版、宮本常一先生と共著で刊行)を思い出す。「おまえ、何をしに来た。なに調査した? バカセなら毎年何十人もくるぞ」。これは、著者が西表島の住民から浴びせられた言葉を一つ。安溪さん、これを肝に銘じ、常に現地目線で仕事を続けられてきた。

よね。フェリーの抜港は辛からうが、小笠原だとトックに船が入ると、下手すりゃ3週間は来ない。この冊子を見たら、小笠原の人々

あ、これは与論だけではなかったね。山口在住の人類学者、安溪遊地さんが書いた「調査されるという迷惑」(みずのわ出版、宮本常一先生と共著で刊行)を思い出す。「おまえ、何をしに来た。なに調査した? バカセなら毎年何十人もくるぞ」。これは、著者が西表島の住民から浴びせられた言葉を一つ。安溪さん、これを肝に銘じ、常に現地目線で仕事を続けられてきた。

一人で行ったのだが、与論は事情があり、結局、彼は戻りながら、いまは亡き友を偲んだ。

翌朝、観光案内書である(北緯27度)同じ大きさ(20平方キロ程度)とはいえ、地元も取材にかなり関わっ

ている。与論だって鹿児島市から550キロの離島といえはその通り。でも、間に幾つも飛行場を持つ島があり、伝いにホッパーで着く。

よね。フェリーの抜港は辛からうが、小笠原だとトックに船が入ると、下手すりゃ3週間は来ない。この冊子を見たら、小笠原の人々

東京目線の比較で喜んでいる場合じゃないぞ。境界の島々よ、もちっと団結しようじゃありませんか!

(北海道大学教授)